

パラレルワールド

第 3 回

加奈子^{かなこ}は裕彦^{ひろひこ}を連れて、避難所へと向かっていった。

裕彦は「お父さん」と話し、避難所に行くことになったと言った。

それは本当のお父さんじゃない。

そう言おうかどうか、加奈子は迷った。

一時的なショックでお父さんの幻を見ているだけよ。

そう言ってしまうえば、裕彦の見ている良平^{りょうへい}の姿は消えてしまうのかもしれない。だけど、それは本当に正しいことなのかしら？ 今の裕彦にとって、両親^{そふ}が揃った家族はとても重要なものなのかもしれない。その理想^あを敢えて打ち砕く意味がどこにあるのかしら？ 今はまだいい。裕彦に現実を受け入れさせるのは、現実を受け入れる準備ができてからでいい。

「お母さんもそれがいいと思うわ」加奈子はつぶ

濡れのままの裕彦に言った。「お父さんにそう言
つて」

「それがいいって」裕彦は空間に向かって言った。

「避難所に行くの。いい考えだつて」

「お父さん」は裕彦に何かを答えたようだ。

「うん」裕彦は返事をした。

話は纏まとまったようだ。そもそも、提案したのは
「お父さん」の方からなので、当然だろう。

「よし、じゃあ、二人で行こうね」加奈子は言っ
た。

「三人だよ」

「そうだね。三人だね」

裕彦は両腕をYの字の形に持ち上げて、片手で
加奈子の手を握り、歩き始めた。

最初、何をしているのかわからなかったが、そ
のうちもう一方の手は「お父さん」の手を握って
いるのだと気付いた。

加奈子の心に、悲しみと愛情と不気味さと、そ
の他ありとあらゆる感情が押し寄せた。

単に精神的な問題ではないのかもしれない。

加奈子は不安を覚えた。

裕彦は水中で窒息し、しばらく呼吸が止まっていた。ひよっとすると、心臓も止まっていたかもしれない。その間に、脳に損傷があったのかもしれない。

心臓は大雑把に言えば、単なるポンプに過ぎない。感情の起伏に敏感に反応するため、大昔にはそこに心が存在すると思われていたが、現代ではそれは誤りだったと考えられている。心臓は重大な臓器だが、その構造や働きは比較的よく理解されている。

だが、脳は違う。人間の精神はそこで産み出されていると考えられているが、その原理や機能の解明は殆ど^{ほとんど}手付かずの状態だと言ってもいい。解明への最大の障害は、人間には精神そのものを観察する手立てがないことだ。人間が知っている精神は自分の精神だけだ。たとえ、家族であったとしても、自分以外の精神を知ることが全く不可能なのだ。もちろん、脳波や血流を測定することで、脳の活動を知ることができ、それから精神状態を

推測することはできる。だが、それは「怒っている」「楽しんでる」「目を使っている」「リラックスしている」「計算している」といった程度であって、具体的に、どのような思考を行っているのかはわからないのだ。

だから、脳の機能は推測するしかない。コンピュータの働きに似ているというのも、推測に過ぎない。単なる論理回路の集積体であるコンピュータをどんどん複雑にしていけば、いつかは人間のような知性に至るという考えもある。しかし、意識や自由意思の正体も、その発生の仕方も、現時点では誰も知らないのだ。

人間の脳の内部には、自分の知っている人間と関連している領域があるのかもしれない。その人物と会ったとき、もしくは電話で話しているとき、あるいは単に思い出しているとき、その領域が活性化するのもかもしれない。

裕彦の脳はダメージを受けたため、父親である良平に関連する領域が常に活性化している状態なのかもしれない。

もちろん、これは専門家でもなんでもない加奈子の単なる推測に過ぎないが、科学的に考えるなら、今起きている現象の原因はこういうことになるのではないかと思った。

しかし、加奈子はもう一つの非科学的な原因も頭から離れなかった。裕彦のしているものは彼の脳の中ではなく、外に存在しているのではないかということだ。もちろん、それは物理的なものではない。とない。となると、それは霊的なものであるということになる。

加奈子は何とか、その考えを頭から追い出そうとした。単に非科学的な考えに捉とらわれるのはよろしくないというだけではない。もし、良平の霊がそこにいるとしたら、それは良平が死亡してしまっていることを意味するからだ。加奈子は良平の死など受け入れる気はさらさらなかった。だから、裕彦のしているものは幻であってくれないと困るのだ。

加奈子は避難所の場所など知らなかったが、裕彦はどんどん瓦礫がれきと泥水の中を進んでいく。

「ヒロ君、避難所の場所を知ってるの？」加奈子は念のため、尋ねてみた。

裕彦は首を振った。「知らないよ。でも、お父さんがたぶんこっちだって」

えっ？ それって、わたしたちは幻に導かれていたってこと？ 危ない。危ない。

「お父さんは知ってるの？」加奈子はさらに尋ねた。

「お父さん、避難所がどこにあるか知ってるの？」裕彦は空間に尋ねた。そして、何かを聞いているふうな表情をした後、こう言った。「お父さんも知らないけど、高台に行けばたぶんあるんじゃないかと思うって」

筋の通った答えだわ。低い土地は洪水に襲われているので、いずれにしても高台に向かうしかない。現に、二人が進んでいる道はかなり勾配こうばいは緩いが、上り坂になっている。でも、どうして、裕彦はそんなことを思い付いたのかしら？

「ヒロ君、そんなこと誰に聞いたの？」

「今、お父さんに聞いたんだよ」

まあ、そういう答えになるでしょうね。

加奈子は考え込んだ。

きつと、幼稚園で先生たちに、そういう話を聞いたんだわ。それが潜在意識に残っていて、幻の「お父さん」の言葉を通して現れたのよ。そう考えるのが合理的だわ。というか、そう考えるしか説明は付かない。

裕彦はずつと両腕を上げている。

疲れるんじゃないかと思ったが、それを指摘するのはやめておいた。本人が手を繋いつないでいると思っっているのに、それを否定したら混乱してしまうんじゃないかと考えたのだ。

それに、いくら何でも本当に疲れたら、そのうち腕を下げるはずだしね。

坂を上るにつれて、地面を覆う水は少しずつ浅くなり、ついに単なる泥濘ぬかるみのようになってきた。雨も小降りになり、さつきよりも少し空が明るくなったような気がする。

街の壊れ方も自宅の近く程ではないようだ。周囲を見渡すと、彼女たち以外にもぼつぼつと人影

があった。みんな同じ方向を目指しているようだった。

加奈子は一緒に進んでいる者たちが本当に人なのかどうか不安になって、目を凝らして確認した。なんだか、自分たちが死出の道へと赴く亡者たちのような気がしたのだ。

だが、彼らは紛れもなく生きている人間だった。疲れ果ててはいたが、足を引き摺りながら、高台を目指していた。

さらに十分程進むと、殆どの家が崩壊していない地域に入った。

ほんの一キロかもっと近い距離にあるというのに、これほど被害に差があるのだということをまざまざと見せつけられ、加奈子は打ちひしがれる思いだった。家を選ぶときに自然災害のことなど全く考えていなかったことを強く後悔した。

だが、今更悔やんでも仕方がない。

加奈子は意識的にネガティブな考えを頭から振り払った。

到着したのは、近くの中学校だった。避難所に

指定されているらしい。

百人以上の人々が校庭で途方に暮れたように立ち尽くしていた。

小降りとはいえ、まだ雨は降っているし、身体を乾かす必要がある。加奈子は裕彦を連れて体育館へと向かった。

体育館の中では慌ただしく人々が動いていた。床にシートを敷いたり、マットを運び込んだりしている。どうやらまだ避難所の形にはなっておらず、これから避難所になるところらしい。校庭にいた人々は準備が終わるのを待っていたのだ。

加奈子は自分も何か手伝えなれないかと思ったが、段取りがわからないものがいきなり入っても、迷惑じゃないかと躊躇した。

尋ねてみて断られたら、諦めればいいのかと思い、働いている人の一人に声を掛けようとした瞬間、逆に声を掛けられた。

「申し訳ありません。ひよつとして坂崎さんじゃありませんか？」振り向くと、見知らぬ若い女性が立っていた。スーツ姿だが、びしょ濡れで泥に

塗^{まみ}れている。

この人、きっと大変な目にあつたのね、と思つたが、考えてみると自分の姿もほぼ同じだ。

「はい。そうです。」

「申し遅れました。わたし、坂崎さんと同じ部署で働いている佐藤^{さとう}ひろみと申します。以前、ご家族の写真を見せて貰^{もら}ったことがあったので、失礼かと思つたのですが、声を掛けさせていただきました」

「会社の方はここまで逃げて来られたんですか？」
会社からここまでではかなり距離があるの？

加奈子は怪訝^{けげん}に思つた。

「いえ。会社にいた人たちはだいたい近くの避難所に逃げたと思います。……逃げられた人は……」

ひろみの言葉に含まれている意味を考え、加奈子は悲鳴を上げそうになった。

駄目。怖がらないで。裕彦が怯^{おび}えるわ。

「あの。主人はどこに……」

ひろみの表情からは明らかに恐怖の色が読み取

れた。

ああ。どうして、こんなことを訊きいてしまったんだろう。きっと、この人の口からは聞きたくない言葉が出てくるのよ。

「……じゃあ、ご一緒ではなかったんですね」

「どういうことですか？」加奈子はつい問い詰めるような口調になってしまった。「主人は今日会社のはずでしたけど」

「はい。地震のときもダムの決壊のときもご主人は会社におられました」

「だったら、一緒に避難したんじゃないんですか？」加奈子はなんとか不安を飲み込んだ。

「ご主人は一人で会社を出て行かれました」

「どういうことですか!? 一人で避難したということですか!？」思わず語気が強くなった。

ひろみは首を振った。「避難したわけではありません。……その、ご自宅に向かわれたのです」

「自宅に……」加奈子は目を見開いた。「どうして……」

「ご家族を助けに行くと言われて……」

「家の近くは大変な洪水だったんです……」加奈子は呆然ぼうぜんと言った。

ひろみは無言で頷うなずいた。

「主人は今どこですか!？」

「わかりません。ひょっとして、ご自宅の近くの避難所におられるかと思って、ここに来たのですが……」

加奈子は目を吊つり上げ、ひろみの肩に掴つかみかかった。「どうして、一人で行かせたんですか!? どうして止めてくれなかったんですか!？」

ひろみの唇はわなわなと震えていた。

「主人はどこですか!? ここに連れてきてください!!」加奈子は金切り声を上げた。

「お父さんはここだよ」裕彦が眩つふやくように言った。

「えっ?」ひろみは周囲を見た。

「ヒロ君、黙もくっていないさい!!」加奈子は裕彦に怒鳴り付けた。

裕彦は顔を顰しかめ、しくしくと泣き出した。

息子の泣く姿を見て、加奈子は我に返った。

「ごめんさい。少し取り乱してしまって……」

「わたしこそ、急に驚かせてしまつてすみません。実はご主人がご自宅に向かわれるとき、お止めしようとはしたんですが、わたしには無理でした」
「そうですね。主人は頑固者なので、いったん行くと決めたら止められませんね」

「お止めできなかったことが気になって、それでご主人をお探ししていたんです」

「つまり……」加奈子は呼吸するのさえ、難しくなってきたが、なんとか喋り続けた。「会社を出て以来、誰も主人を見ていないということですか？」

「……そういうことになります」

「手掛かりはないのですか？」

「申し訳ありません」

加奈子はその場に座り込んだ。

落ち着いて。単に行方不明ゆくえふかめいになっているだけだわ。きっと今頃いましころ、あの人もここを目指しているはずよ。

「奥様、大丈夫ですか？」

「大丈夫です。あなたはこれからどうされるんで

すか？」

「会社の近くに部屋を借りていたんですが、そこも被災してしまいました。会社もしばらくは復興できないでしょうから、しばらく実家の方に戻ろうと思ってます」

「じゃあ、今からそちらの方に？」

「いえ。今日はご主人をお探ししようと思つてます」

ひろみの言葉には決意のようなものが滲み出でいた。

その様子に加奈子はなぜか不安を覚えた。

ああ。わたししたら、こんなときに何嫉妬しつとしているのかしら？ そんなことはあの人の無事が確認できてからでいいのに。

「失礼します。お話が耳に入ってきたのですが」
中年男性が二人に話し掛けてきた。「ひよつとして、坂崎良平さんのご家族の方ですか？」

「はい」加奈子は答えた。「会社の方ですか？」

「いいえ。わたしは違います」中年男性は慌てて言った。

「主人とはどこでお知り合いになられたのでしょうか？」

「わたしは命を助けて貰った者です。齊藤重雄とさいとうしげお申します」

「主人がですか？」加奈子は面食らった。夫が誰かの命を救ったというのは初耳だった。

「はい」

「いつ頃のことでしょうか？」

「今日です」

「今日!？」加奈子より先にひろみが言った。「今日のことですか？」

「ほんの数時間前です」

「それはつまり……」加奈子は言葉に詰まった。

「はい。街が洪水に襲われたときです。ご主人とは今日出会いました」

「主人は……主人は今どこでしょうか？」

「それは……わたしにもわかりません」

「どういうことですか？ わからないって。あなたは主人に命を助けられたっておっしゃったではないですか？ だとしたら、主人の居場所もご存

知なんじゃないんですか？」加奈子は斉藤に詰め寄った。

「奥さん、まずは落ち着きましょう」ひろみが加奈子を制止した。「この方はわたしより後にご主人に会っておられます。だとしたら、直接はご存知ないとしても、この方のお話をお聞きすれば、ご主人の居場所がわかるかもしれません。とにかく何があつたかをお聞きしてはどうでしょうか？」

そう。この人を問い詰めても仕方がない。まずは知っていることをすべて話して貰って、それから何をすればいいか考えよう。

「斉藤さん、あなたと主人に何があつたのですか？」加奈子は自制しながら尋ねた。

「ご主人とわたしは二人とも、人々が避難するのに逆らうように川上に向かって進んでいました。そのことでお互いに気付き、話をしたのです。そのとき、お名前やご家族のことを伺うかがいました」

「避難するのに逆らうように？」

「わたしの家はこの近くにありました。坂崎さんのお宅もこの近くですよね？」

加奈子は頷いた。

「二人とも家族のことが心配で、避難の流れに逆らって進んでいたのです」

「馬鹿なことを……」加奈子は口を押さえた。夫の行動は嬉うれしかったが、反面自分の命を優先して欲しかったのだ。

「わたしたちは、ダムが決壊したといっても、いったいどの程度の水量かわかっていなかったのです。だから、堤防の上を走ることにしたのです」

「堤防って川のすぐ横じゃないですか！」

「ええ。大変危険な行動でした。しかし、一刻も早く家族の元に向かうには、それが最善のように思ったのです」斉藤は続けた。「わたしは途中で完全にばててしまいました。そこで、ご主人に先に行くようにと言ったのです。わたしは少し休憩してから後を追うから、と。ご主人は少し迷われながらも、やはりご家族のことが心配だったのでしょう。わたしは走ることができないまま、とほとほと前に進みました。そのとき、あれが見えた

のです」

「土石流ですね」ひろみが言った。

斉藤は頷いた。「最初は何かわかりませんでした。目がおかしくなったのかと思いました。とてつもなく大きな雲のようなものが凄まじい速度で近付いてきました。ご主人は一瞬、立ち止まると、方向転換し、こちらへと走って戻ってこられました。わたしはだいたいのことを察しました。あれは死神なのだと。あれでは、もう助からない。きつと、家族ももう死んでしまったんだと。わたしは安らかな気持ちで、それを見詰めていたので。ご主人はわたしの位置まで走ってこられました。逃げないと危ないですよ。確かそうおっしゃったと思います。しかし、わたしは一緒に逃げようとは思いませんでした。家族が死んでしまったとしたら、生きていても仕方がないと思ったんです。今から考えてみると、家族が亡くなったかどうかなんて、わかるはずはないんです。でも、あの恐ろしい水と土と石と流木と何かわからないものの塊を見た瞬間、ああ、もう家族はいないんだ

な、と直感したのです。逃げますよ。そんな声と共にわたしは手を掴まれました。わたしは逃げるのを拒否しました。すると、ご主人は言ったのです。家族に会いたくないんですか。避難してるかもしれないじゃないですか、と。そうです。わたしは思い込んでいたのです。家族はみんな一緒に逃げなくてはいけないと。わたしだけで逃げたり、わたし抜きで逃げたりはありえないと。しかし、ご主人はわたしに言ったのです。津波でんでんこですよ、と。そして、わたしはご主人と一緒に走り出していました。たとえ家族であっても、みんながばらばらに逃げてもいいんだと気付いたんです。みんながばらばらに逃げて、みんながばらばらに助かれば、また家族一緒になれる。逃げるチャンスがあるのに、逃げなかつたりしたら、それでももう永久に家族に会えなくなるんだと。わたしたちは必死に走り続けました。轟音は物凄い速度ものすごいで追いついてきました。わたしたちは何かに背後からぶつかられ、そして弾き飛ばはじばとされました」

「そのときまで主人と一緒にだったんですね」

「はい。そのときまでは。そして、次に気付いたとき、わたしは濁流の中にいました。堤防も川も住宅地も一瞬で消え失せ、目の前には圧倒的な水だけが存在していました。わたしは懸命に泳ごうとしましたが、水に翻弄され、手も脚も出ませんでした。そのとき、何かがわたしを絡め取るようにして、水から引き上げたのです。それは電線のようにでした。その先を見ると、水の中から先端だけが突き出ている街路樹に引っ掛かっており、なんとか固定されているのがわかりました。わたしは電線を辿たどって、街路樹の方に向かいました。周囲には様々なものが流れていました。家や車や、そして人も」

「主人は？　主人もその電線に掴まっていたんですよね？　主人は今どこにいるんですか？」

齊藤の目からは大きな涙が零こぼれた。「わたしはご主人を見付けました。近くの別の街路樹の細い枝に掴まっておられました。ご主人はわたしに大丈夫ですかと声を掛けてくださりました。でも、わたしには返事をする余裕もなかったのです。そ

して、次の瞬間、ご主人が掴まっていた細い枝は折れてしまいました。ご主人は濁流に飲み込まれ、水面に出てくることはありませんでした」

「何を言ってるんですか？」加奈子は言った。

「何をおっしゃっているのか、意味がわかりません。わたしは、今主人はどこにいるのかわかって訊いてるんですよ」

「ご主人は……濁流に飲み込まれたのです」

加奈子にはもはや斉藤が何を言っているのか、理解できなかった。

仕方がないので、ただぼんやりとその口の動きを眺めていた。

高台に向かって登っていくと、そこに避難所らしき学校が見えてきた。

良平は裕彦の手を引いて、校庭に入った。

裕彦はまだ両腕を上げていた。もう一方の手を妻が握っているということらしい。

良平は裕彦のもう一方の腕を押さえて、下げさせた。

裕彦は怪訝そうな顔で良平を見た。

「そっちの手を上げるのはやめようね。みんながおかしいと思うから」

裕彦は納得がいかないようで、また腕を持ち上げた。

「だから、もうお母さんは……」良平はどう言っ
て裕彦を説得していいか、わからなくなってしま
った。

そのお母さんは幽霊だから、みんなには見えな
いんだよ。

これでは、ストレートに彼の心を傷付けてしま
う。もっと優しい言い方じゃないと駄目だ。

そのお母さんはヒロ君の心の中にしかいないか
ら、みんなには見えないんだよ。

そうこっちの方がいい。

どうして、僕の心の中に入ったの？

それはね、ヒロ君が寂しくないようにだよ。ヒ
ロ君の心の中に入れば、いつでも一緒だからね。

これでいいのか、こんなことで納得させられる
のか？

良平には皆目見当が付かなかった。

下手なことは言わない方がいいかもしれない。

今、裕彦の心の中で何が起こっているのか、俺おれに
は理解できていない。それなのに、素人考しろうとえで適

当なことを吹き込んだりしたら、後でそれが精神
に重大な影響を与えてしまうかもしれない。目の
前で母親が死んだことは理解できていないとして
も、母親が家の残骸ざんがいに押しつぶされたことは見た
はずだ。彼の心は今とてつもないストレスストレスに曝さらさ
れている。そつとしておくのが一番だろう。

良平は裕彦に何も言わないことにした。

二人は体育館に向かった。

体育館では被災者を受け入れるための準備が行われていた。

「ヒロ君、ここで待っていなさい。お父さんは今からみんなのお手伝いをして……」

「坂崎さん！」突然、背後から呼ばれた。

振り返ると、そこにはひろみがあった。

「佐藤さん、どうしてここに？」良平は驚いて言った。「会社からここまで結構あるだろ」

「坂崎さん、ここにいたのね。あの後、土石流が会社まで押し寄せたのよ」

「会社のみんなは？」

「土石流が来るまでに逃げた人たちがどうなったのかはわからない。会社に残っていた人たちはとりあえず四階に上がったの」

「四階までは水が来なかったんだね」

「三階と四階の間の階段までは来ていたわ。もうみんな覚悟はしていたと思う。だけど、幸運なことに、それがピークで水は急速に引き始めたの

よ」

「会社の辺りは結構勾配が急だからね。水はもつと下流側に溜^たまったんだろう」

「それでも、まだ水は腰ぐらいまであったけど、みんなは泥水を掻^かき分^わけて、近くの小学校に向かったの。そこが避難所になっていると知っている人がいて……」

「君はどうしてその避難所に行かなかったんだ？」

「一度は行こうと思ったの。でも、坂崎さんのことが気になって……」

「俺のことが？」

「わたしはあなたを止められなかった」

「……津波でんでんこのことか？」

ひろみは頷いた。「わたしが止められなかったせいで、坂崎さんに何かあったらどうしようかと思っ……」

「……君に止められなくてよかった」

「えっ?」

「もし君に止められていたら、俺は家族を二人とも失っていたことになる」

「どういうこと?」ひろみは裕彦を見た。「まさか……」

「妻は亡くなった」

「そんな……行方不明なんですよ? だとしたら、まだ希望は……」

良平は首を振った。「行方不明じゃない。俺自身を確認した」

ひろみは目を見開き、呆然とした。「奥様を看取ったということ?」

「俺が駆けつけたときにはすでに亡くなっていた。この子を守ったまま」

「じゃあ、お子さんは奥様が亡くなるのを見てたの?」

「ああ。ただ、幸運なことにこの子はまだ事態を把握していないようだ」

「奥様を見ていたの?」

「不思議なことなんだが、この子にとって母親はまだ生きているようなんだ」

「単に眠っているだけだと思ってるのね」

「そうじゃなくて、ここにいると思ってるよう

なんだ」

「それはつまり幽霊とかそういうこと？」

「そうなのかもしれない。あるいは、単なる幻覚なのかも……」

ひろみは黙った。

「気味が悪い話だろ？」

「そんな……」

「でも、俺は全然怖くないんだ。もし本当に加奈子の幽霊がいるのなら、俺自身が会ってみたいと思っっている。この子のおかげでなんだか加奈子を身近に感じられるんだ」

「お父さんはここだよ」裕彦が呟くように言った。

「今、この子は母親に報告したんだ」

「報告？」

「母親に俺はここにいと報告したんだ」

「どうということ？ 逆じゃないの？ 坂崎さんに霊である母親がここにいと教えるならわかるんだけど」

「それがどうやらそうじゃないらしいんだ」

「なんと、ここにおられたんですか！」中年男性

が近付いてきた。

「あなたも助かったんですか？」良平は男性に言った。「ええと、お名前は……」

「斉藤です。斉藤重雄と申します」

「それで、あの……ご家族の方は……」良平は訊き辛^{づら}そうに言った。

「それがまだわからないのです。あなたの方のご家族は無事だったようですね」斉藤は裕彦とひろみを見て言った。

ひろみは困ったような顔をして俯^{うつむ}いた。

「ああ。この人は違うんです」良平は言った。

「妻ではありません。会社の同僚です」

「これは失礼しました。それで、奥さんの方は……」

「子供は助かりました」良平は裕彦の肩に手を置いた。「しかし、妻の方は駄目でした」

「あの……それは確かなんですか？」斉藤は言った。

「単に行方不明ではありません。わたし自身が遺体を確認したんです」

「そうだったのですか」斉藤は誰もいない場所をじっと見てしくしく泣いている裕彦の方を見た。

「あの、お子さん、大丈夫ですか？ 単にシヨックを受けているだけかもしれません」

「今もその話をしていたんです。あの子には母親が見えているようです」

斉藤はしばらく黙っていた。良平の言葉の意味を図りかねているのだろう。

「わたしがそれをどう思っているのかと考えるとっしやるんですね」良平は助け舟を出した。「息子と同じように信じているのか、それとも単なる幻覚だと思っているのか。あなたは間違った対応をしないように気を遣っておられる」

「はあ。まあ……」

「彼女だってそうです。わたしの正気を疑っている」

「そんなことは言っていないわ」ひろみは慌てて否定した。

「口では言っていないが、顔に書いてある」

「で、どっちなの？」

「ふむ」良平は腕組みをした。「自分でもまだ理解できていない」

「ご自分の心がですか？」斉藤が尋ねた。

「そういうことでしょうね」良平は答えた。

「これだけのことがあったのだから、当然でしょう。わたしだって、できれば家族の姿を見たい。

強く見たいと思えば見えるものかもしれません」

「しかし、わたしには見えない。見えるのは息子にだけです」

「子供は現実と空想の垣根が曖昧だからだと思うわ。あなたは義務感から現実を受け入れているけど、小さな子にそれは酷すぎるわ」

「確かにそうなんだけど、妙に辻褄が合っているというか……」

「わたしは精神について詳しい訳ではありませんが」斉藤が言った。「ひよつとしたら、あなたと息子さんは共同で幻想を作り上げようとしているのかもしれないよ」

「わたしは幻覚など見ていませんよ」

「でも、息子さんが奥さんの姿を見ていると思っ

てますよね」

「それは事実ですから」

「でも、実際、あなたにはそれが事実だと確かめる術すべはないんですよね」

「ちょっと待ってください。あなたはうちの子が嘘うそを吐ついているとおっしゃるんですか？」良平は不快感を隠そうともせずに言った。

「そういう訳ではありません。ただ、この年齢だと願望と現実の区別がまだ付かないんじゃないかと」

「わたしも願望を現実と混同しているか？」

「だから、そういうことではないんですよ」

「二人とも落ち着いて」ひろみが割って入った。

「坂崎さんは奥さんのことで悲しんでるし、斉藤さんもご家族のことが心配で気が気ではないんでしょう。そもそも、そんな状態で精神分析なんてできるはずないでしょ」

「確かにそうです」斉藤が素直に認めた。「わたしは不安のあまり攻撃的になってしまったようです。わたしは命の恩人であるあなたに感謝したか

っただけなのに、逆にご迷惑をお掛けしてしまいました」

「命の恩人？ わたしが？」

「はい。あなたは迫りくる土石流をほうつと眺めていたわたしの手を引いて一緒に逃げてくださいました」

「そう言えば、そんなことをしたような気がしますが、結局たいして助けにはならなかったように思います」

「しかし、現にわたしは生きています」

「わたしが手を引かなくて、助かったでしょう」

「そんなことは誰にもわかりません。ただ、あなたはわたしの命を助けようとし、わたしは命拾いした。この事実だけで、わたしがあなたに感謝する理由になるのではないですか？」

良平は額に手を当てた。「ちよつと混乱してきました。何がなんだか、誰が誰を助けて、誰が誰を助けられなかったのか、わからなくなってきました」

「申し訳ありません。混乱させるつもりはなかったんです。それでも失礼します」斉藤は頭を下げて立ち去ろうとした。

「これからどちらに行かれるんですか？」良平は斉藤に尋ねた。

「もう少し家族を探してみます」斉藤はとほとほと歩いて行った。

そうだ。彼は家族を探していたんだ。

良平は強く言ってしまったことを後悔した。

「人助けしたんだ」ひろみが言った。

「人助けって程じゃない。自分が逃げるときに声を掛けただけだよ」

「自分の命が懸かっているときに他人の命を気に掛けるってなかなか凄いことよ」

良平は自宅に向かう途中、いくつかの助けを求め、声を無視したことを思い出した。自分の家族を優先して、俺は何人か見殺しにしてしまったかもしれない。

腹の中にずしりと重いものを感じた。

「助けようとしたのはあの人だけだ。家に向かう

途中では誰も助けようとしなかったんだよ、俺は！」

「そんなの当たり前のことだわ。自分の家族と他人を平等に扱えるような人はそもそも家族なんか持たないわ」

そうなんだろうか？ 俺の行動は正しかったのか？

良平はさらに混乱した。

ひど酷い眩暈めまいがする。

「誰も助けなかった。そして、加奈子も助けられなかった」

「それはあなたのせいじゃ……」ひろみが言った。

「お母さんはここにいるよ」裕彦は空間を指差した。

良平は裕彦の何かを指差す手を両手で包んだ。

すると、裕彦はもう一方の手で良平を指差した。

「お父さんはここにいるよ」

「対等なのね」ひろみは呟いた。

「えっ？」

良平にはひろみの言葉の意味がわからなかった。

「裕彦君にとっては、あなたと加奈子さんは対等なのよ。お父さんにはお母さんが見えない。お母さんにはお父さんが見えない。そして、自分には二人が見える。単なる生きている人間と幽霊じゃ対等じゃないものね。きつとそういうことなのよ」

対等……。

何かが引つ掛かった。

どうして、生きている者と死んでいる者が対等なんだ？ それは裕彦の願望に過ぎない。対等なんて言葉は生きている者にしか意味がない。いや。ある意味、死んでいる者たちはみんな平等で対等なのかもしれない。

裕彦は良平と空間を何度も見比べていた。

「佐藤さん」

「はい」

「俺と裕彦を二人だけにしてくれないか」

「でも……」

「俺たちは大丈夫だ。それより、君の方は大丈夫なのか？」

「わたしは実家の方に戻ればなんとかなると思う。震源地からは離れているし……」

「もう連絡はついたのか？」

「それはただだけど……」

「まずは実家との連絡を優先した方がいい。俺は裕彦と話し合わないといけないんだ。俺たちは家族だから」

ひろみは何か言おうとしたが、それを飲み込んだようだった。

「そうね。わたしは家族じゃない。余計な口を挟んでごめんなさい」ひろみはその場をそっと離れた。

さて、裕彦にどう言えばいいのだろうか？

「どうして、お姉さんは二人になったり、重なって一人に戻ったりしたの？」

どういうことだろう？ 裕彦にきょうだいはいない。この上、幻の姉まで現れたというのか？

「ヒロ君にはお姉さんは一人もないだろ？」

「違うよ。お父さんのお友達のお姉さんのことだよ」

なんだ。佐藤ひろみのことか。しかし、彼女は一人しかいない。どうということだろうか？

「お姉さんは一人だろ？」

「違うよ。二人になったんだよ。お父さんとお喋りしていたお姉さんとお母さんとお喋りしていたお姉さん」

加奈子とひろみが喋っていた？ そんなことはありえない。そもそもあの二人に面識はなかったはずだ。

「お母さんとお姉さんが喋ってたって、いつのことだい？」

「今も喋っているよ」裕彦は空間を指差した。

どうということだ？ 裕彦は自分の妄想を成立させるために、幻覚の中にひろみを登場させたのか？ だとしても、現実のひろみと二重に出現したのはどういうことだ？ ひろみを幻覚の中に登場させるぐらいなら俺を登場させるべきなんじゃないか？

「ヒロ君、お父さんは一人なのかい？」

「うん。お父さんは一人だよ。お母さんも」

どういうことだろうか？

良平は考えた。

裕彦のしている世界には何かのルールがあるよ
うだ。だが、どんなルールだろう？ 加奈子も一
人、俺も一人、だが、ひろみは二人。……そうだ。
「おじさんはどうだった？ 一人かい？ 二人か
い？」

「さっきのおじさんは二人になったよ」裕彦は答
えた。

「おじさんの一人はお父さんと話して、もう一人
はお母さんと話していたんだね？」

「うん。そうだよ」

俺と加奈子は一人ずつしかいなくて、他の人間
は二人ずついるのか？ でも、どうしてそんな複
雑な幻覚を見ているんだ？

「対等なのね」

突然、さっきのひろみの言葉を思い出した。

対等。そうだ。対等なのだ。俺だけが生者の世

界にいて、加奈子が死者の世界にいたのでは対等ではない。加奈子もまた生者の世界に住み、生者と会話できるんだ。だが、どうして生者として振る舞っている加奈子は生者である俺と会話ができないんだ？

もやもやとした感覚が頭の中でだんだんと形になってきた。

そう対等なんだ。俺と加奈子が対等だとしたら、二人が住む世界もまた対等なはずだ。

自分でも馬鹿げた考えに思えた。理屈では全く説明が付かない。加奈子に死んでいて欲しくないという願望と実際に彼女の死を確認した事実に折り合いを付けるための妄想——他人はそう思うだろう。もし他の人間がこんなことを言ったとしたら、良平だって妄想だと判断するだろう。

だが、絶対にあり得ないと言い切れるだろうか？ 加奈子は災害を生き延びられなかったが、俺と裕彦はなんとか生き延びることができた。だが、それはほんの紙一重の違いだったはずだ。俺が死んで加奈子が生きていてもおかしくなかった。

そして、裕彦は殆ど死んだと同じと言ってもいい状態におかれたのかもしれない。その異常な状態で裕彦は何かを越えてしまったんじゃないだろうか？ 俺が生きて加奈子が死んだ状況と加奈子が生きて俺が死んだ状況が二つとも現実で、裕彦はその両方で生きているとしたら……。

その考えは良平の心を捉えた。それは恐ろしい考えでもあったが、甘く幸せな考えでもあった。どこか近くに加奈子が生きている世界があるのだが、二つの世界は隔絶している。互いに接触することはできない。

いや。そうじゃない。二人は接触できるはずだ。

「ヒロ君、お父さんの言うことをよく聞くんだけ」

「うん」

「今、お母さんは誰かと話しているかい？」

「今は話していないよ。お姉さんもおじさんもどこかに行っちゃったから」

「お母さんは今どうしている？」

「泣いているみたい。お母さん、どうして泣いているの？ ……お父さんに会いたいからだって」

「お父さんはここにいて言ってるよ」

「もう何度も言ってるよ」

どうすれば、加奈子に俺は幻覚じゃないとわかって貰えるだろう？

だんだんと現実感が薄れてきた。俺は誰に何をわかって貰おうとしているんだ？ 幻覚の中の加奈子に俺は現実だと知らしめたいのか？ いや。そもそも俺が現実だというのは正しいのか？ ひよっとして俺はもう死んでいて幽霊になっているんじゃないか？ あるいは、俺自身幻覚で自分を人間だと思い込んでいただけだとか。

いや、それだと辻褄が合わない。俺が幽霊だとしたら、ひろみや斉藤はどう説明するんだ？ 彼らも幽霊だとしたら、生きている加奈子と会えるはずがない。また、彼らが裕彦の幻覚であるはずはない。なぜなら、彼らは裕彦と会ったことがないからだ。

そう。俺は生きている。だとしたら、加奈子だって生きていてもおかしくはない。

「お母さんにこう言うんだ。『キヤツシユカード

の暗証番号を言ったら、僕を信じてくれるの』って」

「キャッシュカードの暗証番号を言ったら、僕を信じてくれる？」裕彦は空間に向かって言った。

「お母さん、『何を言ってるの？』って」

「ヒロ君、お父さんの言う通りに言うんだ。八、三、一……」

裕彦は番号を言った。

「次はお母さんの実家の電話番号だ。〇三……」

裕彦は続けて言った。

「お母さんが『どうしてその番号を知ってるの？』って言ってるよ」

「『お父さんがここにいるからだよ』って言って。」

それから『お父さんしか知らないこと、何でも訊いて』って」

裕彦は空間に話し続けた。

「『わたしが実家で飼っていたインコの名前は？』だって」裕彦が言った。

「『イリス』だ」

「イリス。……お母さん、驚いてる。『本当にお

父さんの幽霊がここにいるの?』って」

どうやら、幻覚ではないと納得してくれた。だが、まだ幽霊だと思っっているようだ。さて、次は俺自身を納得させなくちゃいけない。裕彦の見える加奈子は幻覚ではなく、なにかしらの実体があるということ。

「お母さんに『お父さんが結婚前に住んでいたアパートの住所は?』って訊いてごらん」

裕彦は空間に尋ねた。

「『なかばらちよう中原町三丁目……』」裕彦は正しい住所を言った。

「どうだろう? これだけで俺は信じられるのか?」

良平はポケットを探った。財布と一緒にカード入れが出てきた。その中にクレジットカードがあった。加奈子は家族会員になっているので、下四桁けた以外は同じ番号のカードを持っているはずだ。

「お母さんに『クレジットカードを持ってるか』って言って。『持ってるなら番号を読み上げて』って」

クレジットカードカードの番号は十六桁もある。もちろん、覚えようと思えば覚えられるだろうが、裕彦にカードの番号を暗記させるような局面はさすがに考え辛い。基本、子供にクレジットカードは触れさせない。

そして、裕彦は正確に番号を読み上げた。

これで決まりだ。加奈子はここにいる。そして、幽霊でもない。幽霊はクレジットカードなど持っていない。

「ヒロ君、これからお父さんとお母さんは長いお話をしなくちゃいけないんだ。でも、お父さんはお母さんの言葉が聞こえないし、お母さんはお父さんの言葉が聞こえない。だから、ヒロ君にお手伝いをして貰わなくっちゃいけないんだ。わかるかい？」

「うん」

「お父さんが喋ったことをそのままお母さんと言うんだ。そして、お母さんの喋ったことをそのままお父さんに言う。疲れたら、休んでもいい。ゆっくりでもいい。だけど、間違わずにちゃんと話

さなくつちやならない。ヒロ君、できるかな？」

「僕できるよ」

良平には裕彦のあどけない顔が光り輝いているように見えた。